様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２００８４

研究課題名（和文）学生アスリートのコンピテンシーの実態解明と授業モデルの構築に関する研究

研究課題名（英文）Study on the actual situation of student athlete's competency and the construction of a teaching model

研究代表者
小野　雄大（ONO, Yuta）

早稲田大学・スポーツ科学学術院・講師（任期付）

研究者番号：６０７７９２７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は，学生アスリートの有するコンピテンシーやキャリア形成の実態を明らかにした上で，学生アスリートの教育支援に資するための知見を得ることであった．そのために本研究では，質問紙調査，面接調査、文献研究を組み合わせて，質的・量的研究の両面から研究課題の達成に努めた．
　その結果，学生アスリートの競技経験は，必ずしもキャリア形成に対する自信につながるわけではないことが明らかになった．実践的示唆として，学生アスリートが築いてきたキャリアへの理解を深めながら，大学卒業後の社会生活の困難さについてもリアリティをもって教えていくことが重要であることがわかった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
1）学生アスリートの社会的位置づけをめぐる議論や，そこに内在する問題点を明らかにすることによって，現在の学生アスリートの特質を理解することができるようになる．
2）学生アスリートの有するキャリア観や悩みを明らかにすることで，キャリア形成に伴う将来的な不適応を予測し，労働に対する意識変革を促すなどの具体的な支援方策を提案できるようになる．
3）スポーツ推薦入試の歴史的な展開を理解し，その上で実施状況を実証的に分析することによって，スポーツ推薦入試が抱える課題や今後のあり方を具体的に議論することができるようになる．

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to clarify the actual conditions of competencies and career development of student athletes, and to obtain knowledge to contribute to the educational support of student athletes. To this end, this study combined a questionnaire survey, an interview survey, and a literature review to accomplish the research questions from both qualitative and quantitative research perspectives.
　The results revealed that student athletes' athletic experience does not necessarily translate into confidence in their career development. As a practical suggestion, we found that it is important to deepen student athletes' understanding of the careers they have built and to teach them about the difficulties of post-secondary life in society in a realistic manner.

研究分野：スポーツ教育学

キーワード：学生アスリート　体育会系　スポーツ推薦入試　キャリア形成　メリトクラシー　大学スポーツ　スポーツ教育　スポーツ倫理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では以前より，学生アスリートへの教育支援，健全な組織運営などにおいて数々の課題が指摘され，長らく大学スポーツのあり方をめぐって抜本的な制度改革が求められてきた．そのため，アメリカの全米大学体育協会をモデルに，2019 年に日本の大学スポーツを大学横断的かつ競技横断的に総括する組織として，大学スポーツ協会が創設された．

一方で，大学スポーツをめぐる事件が連日のように報道されている．2018 年に社会問題にもなった「大学アメリカンフットボール部危険タックル事件」を筆頭に，各事件からは，大学運動部の閉鎖的な組織体質や脆弱なガバナンスが露呈され，さらには，大学教育そのもののあり方にまで批判が及んだ．大学スポーツが教育活動の一環であることに鑑みれば，いかに組織的整備が進んでも，その前提となる「教育」そのものの在り方が問われなければ，どんな改革も意味をなさないだろう．

しかし，現実には「学業と競技活動の両立」や「キャリア支援」など解決すべき課題は山積している．各大学には，こうした課題を乗り越え，学生アスリートに充実した教育を施すとともに，大学スポーツの意義を社会に示すことが求められている．

そこで，本研究が課題解決の手がかりとするのが，学生アスリートのコンピテンシーである．コンピテンシーの重要性は知識基盤社会の到来に伴って高く認知されるとともに，その育成は多くの国で喫緊の教育課題となっている．

学生アスリートもまた，競技生活を通して特異な研鑽を積む中で，固有のコンピテンシーを育んでいることが強く想定される．それは，いわゆる「体育会系」言説に見られるように，学生アスリートが有する能力や経験が，就職時などの現実社会の中で評価を受け続けてきた実態からも実感されるものであろう．こうした意味で，学生アスリートのキャリア形成をめぐる実態の解明と合わせて，多角的なアプローチからの研究の蓄積が重要な意義を持つだろう．

したがって，学生アスリートのコンピテンシーやキャリア形成の実態，さらには，学生アスリートに関わる諸制度に着目することは，学生アスリートへの教育支援方策を構築するための有効な取り組みになると考えられる．

２．研究の目的

本研究の目的は，学生アスリートの有するコンピテンシーやキャリア形成の実態を明らかにした上で，学生アスリートの教育支援に資するための知見を得ることである．本研究の中心的課題として，以下の 4 点を設定した．

研究１　日本における学生アスリートの社会的位置づけの解明
研究 2　学生アスリートの「キャリア観」の解明
研究 3　学生アスリートの進路選択に生じる「悩み」の解明
研究 4　スポーツ推薦入試成立後の制度の拡大過程と計量的な実態の解明

３．研究の方法

研究 1 では，大学紛争を扱った新聞記事（朝日新聞，読売新聞，毎日新聞），雑誌記事・論稿，

文部省関連資料，さらに運動部活動が盛んに行われてきた大学の大学当局の資料（各大学の関連文書など）と運動部の動向を示す資料（大学スポーツ新聞，体育会機関誌など）を用いて，文献研究を行なった．

研究 2，研究 3 では，2020 年から 2021 年にかけて，全国の国公私立大学の学生アスリートを対象に，質問紙調査（予備調査，本調査）および面接調査を行なった．

研究 4 では，大学当局の入試実施状況を示す資料（各大学の入試関連文書など），大学運動部の動向を示す資料（各大学の学内報や大学スポーツ紙など），文部省・文部科学省関連資料，そして，スポーツ推薦入試の入学試験要項を用いて，文献研究を行なった．

４．研究成果

（1）研究 1 では，大学紛争期における学生アスリートの働きを通して，一般学生とは違う「特別な存在」としての位置づけが確立されるプロセスが明らかになった．学生アスリートに対しては，大学紛争の際の暴力行為や，その後の大学改革の過程でのセミプロ化が問題視された．そのため，「学生アスリートは暴力的で学業を軽視する」といったネガティブなイメージが形成され，大学運動部の活動体制に負の影響を及ぼした．最終的に，学生アスリートにはこうしたイメージ形成に基づいて，「体育会系」という呼称が付与された．

（2）研究 2 では，学生アスリートのキャリア観が，「自己の研鑽」，「社会への貢献」，「セカンドキャリアのスタート」，「多難な世界」，「社会的自立の証」という 5 因子で構成されることが明らかになった．競技引退後の職業生活への円滑な移行に向けた鍵として「自己研鑽」，「社会的自立」が見出されたことから，競技引退や就職後のモチベーションの喚起を基盤としたキャリア形成支援方策を検討していくことが望まれる．

（3）研究 3 では，学生アスリートの進路選択に生じる悩みが，「競技活動に専念したいという悩み」，「競技活動の継続をめぐる悩み」，「スポーツしかできないという悩み」，「進路決定後をめぐる悩み」，「情報不足という悩み」という 5 因子で構成されることが明らかになった．この結果は，学生アスリートの競技歴は必ずしもキャリア形成の自信には繋がっていないことを示している．

（4）研究 4 では，スポーツ推薦入試の制度的特質として，1）スポーツ推薦入試は，大学経営上の理由に強く影響を受けながら存在する入試制度であること，2）スポーツ推薦入試は，「隠される制度」としての一面を有する入試制度であること，3）スポーツ推薦入試は，「競技実績」に基づく能力主義を原理とする入試制度であることが明らかになった．こうした特質を有するスポーツ推薦入試の拡大は，スポーツ推薦入試が日本社会においてメリトクラティックな選抜機能を付与されていることの証左であるといえる．そして，スポーツ推薦入試の実施率の向上から，競技実績を用いた大学進学は，エリート型からマス型へと変化を遂げたことを指摘することができる．

（5）大学における学生アスリートの位置づけは，「学生の本分」と「競技活動に生じる価値」の狭間で揺れ動いている．学生アスリートという特殊な立場にある大学生の社会への移行，いわゆる「キャリアトランジション」に対する支援もまた，大学教育全体の充実にとって重要な課題である．学生アスリートが築いてきたキャリアへの理解を深めながら，大学卒業後の社会生活の困難さについてもリアリティをもって教えていくことが求められる．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Ono, Y., Kaji, M., and Morita, T.	４．巻 22
２．論文標題 A study of the worries that emerge in the career selection of Japanese student athletes.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Physical Education and Sport	６．最初と最後の頁 1009-1017
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7752/jpes.2022.04128	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 小野雄大	４．巻 71
２．論文標題 「スポ推」の社会的意味を考えるために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 体育の科学	６．最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ono Y, Kaji M, Tozmozoe H, and Yoshinaga T.	４．巻 23
２．論文標題 Who is the student athlete? Focusing on positioning in the campus unrest period in Japan.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Sport in Society	６．最初と最後の頁 1986-2004
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/17430437.2019.1684903	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小野雄大、森田達貴
２．発表標題 大学のスポーツ推薦入学試験制度の実態に関する研究：2023年度入試の「入学試験要項」の計量的分析を通して
３．学会等名 日本スポーツ社会学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小野雄大
２．発表標題 子どものスポーツ環境をめぐる学校と地域の関係を考える：スポーツ教育学の立場から
３．学会等名 日本体育・スポーツ経営学会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小野雄大，梶将徳
２．発表標題 わが国の大学のスポーツ推薦入学試験制度にみる「スポーツメリトクラシー」に関する研究
３．学会等名 日本体育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小野雄大、梶将徳	４．発行年 2022年
２．出版社 小学館集英社プロダクション	５．総ページ数 264
３．書名 新時代のスポーツ教育学：Neo Sport Pedagogy and Andragogy	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関